

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

濱村仁

【所属】(助成決定時)

東京大学

【研究題目】

国際社会における二重基準論争の構造

【研究の目的】(400字程度)

国際社会では「等しきは等しく扱え」という正義理念に悖る二重基準を実践しているとお互いを詰る非難合戦がしばしば見られる。核不拡散体制・通商政策・人権外交・環境保護など広範な分野でこのような論争は繰り返されてきた。国内社会に比べて共有される価値に厚みがないといわれる国際社会において正義や規範が頻繁に語られることをどう理解すべきだろうか。従来かかる論争が発生する構造については正面から学問的検討がなされてこなかった。そのことは国際社会における正義や規範の役割について適切な理解を阻むことになり、国際政治を権力闘争に終始するものと捉える過小評価や国際協調に過剰な期待を抱く過大評価など現実から遊離した極論を生む土壌にもなっている。本研究の目的は、国際社会で二重基準論争が起こる背景を探ることで規範や正義が実際に果たす役割を明らかにし、極論を排して地に足の着いた国際協調への道を模索することである。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究は国際政治学の構成主義者などが提起する規範の衝突・調整、規範解釈の不確定性などの視点に示唆を受けながら、以下の分析枠組みを提出した。すなわち、普遍適用を志向する規範同士が衝突する中で妥協が成立すると(「休戦ライン」)、この妥協は「二重基準の制度化」であるため、その正統性をめぐり二重基準論争が勃発する。規範本来の普遍志向性ゆえに休戦ラインは不安定なので、その引き直しをめぐり勃発する闘争は特定規範の普遍性を訴えて「二重基準」を非難する形をとる。論争が沈静化するには、休戦ラインが以下二種類の方途で正統性を獲得することが必要である。第一は、関係国が他の考慮に基づいて休戦ラインに挑戦を手控える状況が続くことで二重基準の問題が事実上希薄化することである。第二は、休戦ラインが異なる規範を同じような対象に適用し分けているのではなく異なる規範を異なる対象に適用しているのだという見方を広めることで二重基準の問題を解消してしまうことである。二重基準をめぐる政治は、このような論争沈静化に努める動きと論争活性化を狙う動きの綱引きとして捉えられる。

かかる枠組みを前提に核不拡散体制を事例に取り上げ、議論の妥当性を検討した。同体制は核保有の権利を保持する核兵器国(米ソ英仏中)と放棄する非核兵器国(その他)を分ける不平等性のため、二重基準論争を惹起している。この問題は、核保有肯定規範と否定規範の対立の休戦ラインとして同体制を捉えることで分析できた。本来相容れない肯定規範と否定規範はそれぞれの適用範囲を区切って一旦棲み分けたが、その正統性の乏しさゆえに不満勢力からの挑戦に脆弱であり、二重基準論争を巻き起こす。核兵器国を正当化し論争を沈静化させる機能を果たすのは核軍縮交渉義務と原子力平和利用の権利保障だが、それだけではなく核兵器国を「責任ある国」として表象する認識枠組みの普及も重要であった。

【結論・考察】(400字程度)

本研究が提示した国際社会における論争は、権力闘争が表面上規範的言説を装っているに過ぎないわけではない。またそれは規範に拘束されつつも個別利害の追求に誘惑を感じて時折逸脱する国に遵守せよと非難を浴びせることに尽きるわけでもない。むしろそれは、何が正しいのかが不透明な中で規範的な葛藤(と個

別利害の関心)が巻き起こしたものである。権力闘争に過ぎないというシニシズムは自己成就予言となるだろうし、一義に定まる正しさからの逸脱を罰するという発想に立つユートピアニズムは独善を招くだろう。本研究は規範的葛藤に焦点を当てることでこれら両極端を排し、規範や正義が果たす役割についてバランスのとれた見方を示すことができた。また本研究は二重基準問題の希薄化・解消という二つの論争沈静化の経路を示すことで不安定な妥協が安定的な規範へと脱皮していく可能性を示唆しつつも、それがあくまで政治的な過程であることを強調した。